

翌日、帝人はぼんやりと池袋の街を歩いていた。

朝、寝坊することはなく学校にも普通に到着したが、どうにもぼんやりしてしまふ。考えることは一つだけ、昨日のキスのことばかり、繰り返し思い出しては慌てて、赤面して、そして。

(からかわれたんだろうなあ)

そんなことを思う。

昨日、キスをされて本当に驚いた。そうして、その後は帝人の住むアパートに向かい、予定通り鍋を作つて、食べて、それから食後のコーヒーを飲んで。

キスのことなどなかったかのような顔で臨也はその時間を過ごし、そうして、臨也は帰つていった。どうしてキスをしたのか、と何度も問おうとしたけれど、結局聞けないままだ。けれど聞いても、きつと臨也のことだ。

恋人なんだし良いよね。

彼の中で、だからキスは当然のことではかなく、同じ言葉を繰り返すだけだろう。

(そりや、本当の恋人ならそれが理由になるだろうけど)

だって本当の恋人は、お互い好きで、だから恋人になつたわけで、それなら恋人にキスするのは確かに当然なんだろう。好きだから、キスをする。それならわかる。

けれど自分たちは違ふのだ。恋人『ごっこ』にすぎない。

それなのに、彼は自分にキスをした。

そんなことをする必要なんてないのに。

(ああ、でも臨也さん理論だと僕が人間つてだけで、キスする理由になるのかも)

彼は人間を愛してる。人間である帝人のことも、人間だから愛している。愛しているし、今は恋人ごっこの相手でもある。だから、キスするのは当然だ、ということになるのかもしれない。

とりあえず、一度目は過ぎだことだしあきらめるしかない。二度目がないようにするにはどうすればいいのだろう。キスはしないでください、と言えば臨也は面白がつてしようとするか、自意識過剰じゃないかとあざ笑うか、どちらかのような気がする。

(……ホント性格悪いなあ)

しみじみとそう思う。けれど、それが折原臨也なのだから仕方ない。そして仕方ない、と思えないのは。

(イヤじゃなかった自分が怖い……!)

同性にキスされて、嫌悪感がない。驚愕するばかりでイヤだ、とは思わなかった。鳥肌も立たず、つまり自分は臨也とのキス自体に困惑しても拒絶反応がない。

(それって問題だよ。すごい問題だよ!)

あまりにも非日常すぎた、ということだろうか。それは確かに、そうかもしれない。恋人とは言え、男同士だし、『ごっこ』にキスが含まれるとは思つていなかった。だから帝人にとつてはあまりにも予想外すぎた。だから、だらうか。